photography by ©Jun-ichi TANABE

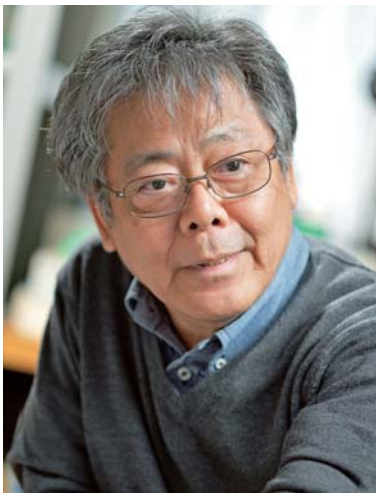
①

インタビュー

レンズを通して見た認知症の歴史と現実

写真家

田邊順一



たなべ・じゅんいち

1937年、熊本県生まれ。日本写真家協会会員。フリーランスの写真家として活躍する中、高度経済成長期の農村撮影時に高齢者の自殺に遭遇。以来、高齢者を中心に「人間」を見つめる取材を続ける。主な著書に「老いー貧しき高齢化社会を生きる」(平凡社)、「老いを生ききる」(法蔵館)、「生きるー老いの光と影」(ばるん舎)。共著に「旅を栖と一軽四輪車十二万キロの老後十年」(青木書店)、「沢内村奮戦記—住民の生命を守る村」(あけび書房)、「老いをゆたかに」(日本生活協同組合連合会)、「銀の糸結ぶとき」(大月書店)、「いのち抱きしめてー在宅介護13年:フォト・ドキュメント」(日本評論社)、「認知症の人の歴史を学びませんか」(中央法規)など多数。85年「老いー貧しき高齢化社会を生きる」で日本ジャーナリスト会議奨励賞受賞。

認知症の人たちとの出会い

八巻　田邊さんが高齢者を中心に人間を見つめる取材・撮影にとりくまれるようになられたのはいつ頃ですか？どんなきっかけがあったのでしょうか？

田邊　昭和30年代、高度経済成長期に若い働き手が都会に出ていってしまい、農村が崩壊していく状態にありました。僕は、そういう村々を取材して歩いていたんです。1963（昭和38）年、岩手県の山村で戦後引揚げ者たちの開拓村にとどまって取材をしていた時、村の周辺でお年寄りが相次いで自殺するという出来事がありました。とてもショックを受け、東京に戻って高齢者の自殺について調べるようになりました。最初は山村の過酷な自然環境と経済的な厳しさもあって、自殺ということになるのかなと思いました。でも、そうではなかった。東京でも同じように高齢者が自殺していたんです。当時の自殺の状況を調べてみると、自殺する年齢には2つのピークがありました。まず、20代半ばから後半にぐっと自殺率が上がるんです。それから下がって、60・70代になるとまた急激に上がっていく。高齢者が自殺する理由は何かと考えた時、僕は一人暮らしによる孤独ではないかと思ったんです。それで都内に住む一人暮らしのお年寄りを訪ね始めました。

64年は東京オリンピックの年でした。当時、東京では高速道路が造られるなど開発がすすむ一方で、青山墓地に掘っ建て小屋を建てて一人暮らしをしているおじいさんがいたりしました。福祉事務所のケースワーカーに付き添って出かけ、高齢者の方々を紹介してもらい、会いに行きました。みなさん高齢ですし、転倒などでケガをすると一人暮らしはもうできなくなり、老人病院に入ることになります。

当時の老人病院は、ひとつの部屋に20ほどのベッドがすき間なく並んでいました（写真①）。通路は狭く、枕元に立つこともできない状態でした。そこで動けないようにベッドに縛られて寝ているんです。年をとってこういう最後を迎えるのは人間としてさびしいなと、若い僕はショックを受けました。それから高齢者の方々の写真を撮るようになりました。当時は、高度経済成長の真っ直中。暗くて、いわば恥部をさらすような写真を発表する場がありませんでした。でも、どうしても気にかかる問題だったので、ずっと撮り続けてきました。

家にいられない人は老人病院へ

八巻　高齢者、特に認知症に苦悩する人たちを長年撮影してこられた田邊さんは、認知症の人の歴史をどのように捉えておられますか。

田邊　60～70年代は、年老いた親などの介護が必要になった時、家族が面倒をみるのが当たり前でした。ただ、在宅でくらす認知症の人の多くは、徘徊などで目が離せないことから、いわゆる座敷牢といわれる部屋に閉じ込められて生活していました。家族にとっても苦しい介護生活。しかも、認知症は恥ずかしいこと、家の恥とされ、隠すわけですよ。家族は閉じ込もって、精神的に追い詰められていました。

63年に老人福祉法ができて、特別養護老人ホームが誕生しました。この特養ホームができたことで、認知症の人たちの入所が殺到しました。ところが、経験や知識の乏し

インタビュアー
八巻瑞穂
神奈川みなみ医療生協
葉山クリニック
ケアマネジャー

い施設スタッフが対応できなかった。そのため翌年には国が、認知症は精神病の一種であり、特養ホームは生活の場だから精神病の一種である認知症は受け入れられないと通達を出したのです。

八巻　特養ホームがダメなら、在宅以外には精神病院か老人病院しか選択肢がなかったわけですね。

田邊　そうです。当時の老人病院は、患者を寝たきりにさせるので床ずれができるのは当たり前、徘徊する人には向精神薬を飲ませたり、動かないように縛ったり…。悪質な病院では検査漬け、点滴漬けにして、最後は死亡退院というケースに。こうした内実は、ほとんど闇の中でした。

　僕は老人病院をずいぶんと回りましたが、取材する時には拘束具が全部外され、ありのままを絶対に見せません。でも、知り合いの高齢者が入院したのでお見舞いに行くと、日常的に縛られているわけです。僕はそれを撮影して、病院スタッフになぜ縛るのかと聞くと、安全のためだというのです。高齢者が転んだら骨折してしまいます。それを防ぐために、やむなく縛るというのです。

八巻　こうしたことは、あまり報道されません。田邊さんの写真は、何も語らなくても高齢者の置かれていた厳しい現実を表現しています。

生きる意欲を育む

田邊　病気の奥さんの介護をされていたMさんの話です。ある時、奥さんが病気の悪化で川崎協同病院（川崎医療生協）に入院することになりました。入院された2日後にMさんも脳卒中で倒れ、救急車で川崎協同病院に運ばれたんです。Mさんは一命を取りとめたものの、奥さんの介護どころではなくなりました。でもMさんは、奥さんを介護するために自分が早くよくならなければと、リハビリに励みました。看護師さんも一生懸命サポートして、共にがんばったんです。そして3か月後、自立の第一歩として排泄だけは自分でできるようになりました。でも医療制度の問題で、長期入院ができません。病院を出なければいけないけれど、一人暮らしも困難となれば、老人病院しかないわけです。Mさんは、在宅への復帰をめざして老人病院に入るのですが、そこではオムツをつけなければいけないという。Mさんは溲瓶（しびん）を使いたいと訴えたのですが、溲瓶のおしっこを捨てに行く人間がここにはいないというんです。同行していた僕が、「他に何か方法はないのか」と尋ねると、使い捨ての溲瓶を使うならいいというので、1週間分を用意してその日は帰りました。そして1週間後に会いに行くと、Mさんはもうすでにオムツ姿になっていました。生きる意欲を失って、その後、すぐ亡くなられました。これに一番ショックを受けたのが、川崎協同病院の看護師さんたちです。

八巻　Mさんと共にがんばった日々が、何の意味もなかったのではと無力感にとらわれてしまいますよね。

田邊　ただ救いがあるとすれば、Mさんが川崎協同病院でのリハビリ生活を思い出した時、きっとそこに明るい光を見たのではないかと思うんです。医療福祉生協には、認知症予防活動を広げるとともに、医療や介護を通して患者さんと共に歩み、生きるための意欲を育んでいってほしいなと思いますね。

②

1984年頃の認知症専用の特養ホーム。モニター画面には、事故防止と職員の人手不足を補うために、各居室と廊下が映し出されていた

インタビュー　田邊順一

認知症に苦しむ人に想いを寄せて

田邊　84年に日本初の認知症専門の特別養護老人ホームができたというので取材に行きました。しかし、そこでも認知症は精神病だという認識で、大きな声で騒いだりすると静養室（写真②）という名の独房のような空間に隔離するんです。静養室には、天井に監視カメラが取り付けられ、床には一組の布団とポカリと空いた便所の穴があるだけ。人権という意識はまったくありません。残念ですが、当時はそれが当たり前でした。

八巻　実は、私も認知症の母を介護していました。どうしていいかわからず本当に困りました。母がやることに対して、いけないと思いながらも責めちゃうんです。そんな自分がイヤで、自分を責めてストレスがたまって、このままではおかしくなると思っていた時に、母が亡くなりました。数か月して母の日記を読み返すと、自分が混乱していく中で、どうしていいかわからなくなると書かれていました。私は、母の気持ちに十分に寄り添えなかったことを本当に後悔しました。認知症の人とその家族の尊厳のあるくらしを守っていくにはどうしたらいいのか、田邊さんのご意見を聞かせていただけますか。

田邊　70年代の終わり頃に「つなぎ服」（写真③）といわれる介護服が、認知症の人の弄便（ろうべん）（便をいじる行為）に悩まされ続けた特養ホームから生まれ、一気に普及しました。その後20年ほど経った99年には、このつなぎ服の使用が禁止されました。弄便は、誰かを困らせるためでも、便で遊びたいわけでもなく、ただ出てしまった便を処理したかっただけということがわかったのです。時代とともに、認知症の人に寄り添い、認知症の人たちの目線でものが見られるようになってきました。介護する側の都合ではなく、認知症に苦しむ人の目線から見たケアがこれからもすすんでいってほしいですね。

八巻　常に介護される人に想いを寄せることが大切なのですね。

田邊　そうですね。ただ僕の場合は、写真を撮るという立場であり、直接介護に携わっ

③

ていないでしょ。自分がこの人だったらどうだろうと考えると、「これはおかしい」ということが見えてくる。

例えば、ある特養ホームでは入浴を週2回実施していました。当時の寮母さんたちは、専門教育を受けていない近くの農村の主婦の方々でした。みなさんやさしい人たちで、週2回ではかわいそう、自分たちがちょっと汗を流せば、週3回はお風呂で気持ちよくなれるだろうと考えたわけです。そしてある時、特別に週3回の入浴を張り切ってやったんです。利用者さんが100人ほどいたので、それこそベルトコンベア式に次から次に入浴介助する。僕は、その様子を写真に撮りながら、「週3回でなくてもいい。1日でいいから、1人でゆっくり入浴できる時間がほしい」と思いました。やっている人たちは本当に善意でやっているし、やった後は達成感のある顔をしています。それを一概に非難はできません。僕が望むのは、介護される人に想いを寄せてほしいということだけです。

その人らしく地域で生きる

八巻　田邊さんは、グループホームをどう見ていらっしゃいますか？

田邊　閉じ込められ、縛られてきた歴史から考えると、認知症の人に対する接し方のノウハウというのは、ここまできたかという感じですね。特に僕がグループホームを素晴らしいと思うのは、最期までその人らしく生きてほしいという想いがスタッフみんなの中に浸透していることです。利用者さん一人ひとり、生活環境も性格も違いますから、お互いにぶつかるのは生きている限り当たり前です。グループホームには若いスタッフもいますし、キャリアのある人もいます。利用者さんもいきいきしていて、どの人がスタッフなんだろうなと思うこともあります。それが理想ですね。

八巻　認知症の人の歴史から、私たちは今何を学ぶべきでしょうか。

田邊　認知症は家の恥というような、無知からくる差別が今もあります。僕たちは認知症をできるだけオープンにしていくことが大切だと思います。そのためには、認知症への理解を深める場をつくっていくことが重要です。認知症になっても安心してくらしていくためには、地域の人が認知症の正しい知識を持ち、みんなで支えあうことが必要です。

八巻　それは、まさに地域づくりということですね。私たち医療福祉生協は、認知症になっても安心してくらし続けられるまちづくりとして、認知症サポーター養成に積極的にかかわるなど、地域の中で認知症への理解を深める活動にとりくんでいます。認知症は、私たちに協同・連帯する気構えを問うている、そんな気がします。地域での助け合いだったり、支え合いが最後は大きな力を発揮するように思います。私たちはこれからも、その人がその人らしく生きられる地域づくりをめざしてがんばりたいと思います。今日はありがとうございました。

インタビュー　田邊順一

田邊順一さんのサイン入り著書をプレゼント！

3名様

『認知症の人の歴史を学びませんか』
中央法規
宮崎和加子 著、田邊順一 写真・文

本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。